日本企業はＮＡＳＡの危機管理に学べ！

扶桑社、258 頁

ISBN 4-594-03660-0（定価 1524 円＋税）、2002 年 8 月 20 日発行

〔 目　次 〕

はじめに

第１章　真実は現場に聞け

第２章　情報は一元化すべし

第３章　組織優先の意思決定の落とし穴

第４章　シミュレーションが危機を救う

第５章　ロシアの宇宙ステーション事故

第６章　国際宇宙ステーションの危機管理

第７章　異文化混合から生まれたマニュアル

第８章　閉鎖空間の危機管理

第９章　決定的な要素－リーダーの資質－

第 10 章　アメリカへの宇宙から神託、火星へ

あとがき

近年、多くの企業危機事例の教訓から、「リスクマネジメント」や「危機管理」といった用語が広く関心を集めている。リスクマネジメント（Risk Management）は、企業経営に悪影響を与えるリスクを把握し、リスクがもたらす損失の極小化を図るもので、企業経営に悪影響を与える重要なリスクを合理的にコントロールするための経営管理手法の一つである。一方、危機管理（Crisis Management）は、企業経営や事業活動、企業イメージに、重大な損失をもたらす、もしくは社会一般に重大な影響を及ぼすと予想される事態を「危機」と考え、万一危機が発生した場合に損失を極小化する活動を指している。

本書は、1970 年の米有人月探査船アポロ 13 号で起こった「奇跡の生還」を題材に危機管理の方法や重要さを学ばせることを狙いとしている。アポロ 13 号が月に向かう途中、酸素タンクが爆発して月への探査をあきらめ、地球へ戻る途中で発生した燃料電池系のトラブルによって、地球への帰還が不可能と思われたが、それを乗り切って無事帰還を果たした。宇宙飛行士と地上の管制官たちはどのようにしてこの危機を乗り切ったのかを克明に再現して危機管理のあり方を説いている。

ＮＡＳＡ（米航空宇宙局）は、アポロ 13 号やスペースシャトルの爆発事故に代表されるいくつもの事故を経験し、その教訓に基づいた危機管理手法を確立している。このＮＡＳＡの危機管理の基本は、What if games（もし、こうなったらどうする）である。トラブルは起きることを前提に不断のシミュレーションを行う必要性を指摘している。その背後要因にある考えは「人間は間違いを犯す（To err is human）」という考え方である。「真実は現場に聞け」「情報は一元化すべし」「ちょっとした不注意から起きた大事故」「どうしてマニュアルを読みたがらないのか」「進化する電子技術と退化する人間の能力」「情報公開は自信の表れ」など、不祥事を起こした日本企業の経営者に聞かせたい項目がいくつもあり、危機管理とともに組織要因のヒューマンファクター問題に関心のある読者は一読する価値があると思われる。